

2024. 2. 25

No.238

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)



能登半島地震で被害に遇った人々への支援を最優先に

新年早々に震度7の能登半島地震に驚きました。一瞬にして、道路が陥没し、大地にしっかり建っていた家々がぱったりと倒れ無残に破壊されたさまをテレビで知り地震の怖さに震えました。地震はどこに住んでいても起こりえます。

被害に遭われて、避難所暮らしや、別の土地で暮らす、その大変さは想像を絶します。2ヶ月が経っても水が出ない、停電、食料がないなど。トイレが不自由なのは、病気の誘発もあり、快適なトイレをいち早く実現してほしいです。炊き出しをするボランティアが減少し、住民の負担増が課題になっているとのこと。インスタント食品で我慢せよとはあまりにも酷すぎます。



2024年元旦、我が家から車で5分。夕張岳の全景が美しい。手前は広大なソーラーパネル
撮影：みな子

一方で政治家は、政治資金パーティーを巡る裏金事件で、私腹を肥やしているのは許せません。東京地検特捜部は早々に捜査を打ち切りました。もっと真剣に捜査してください。

それらのお金を全部返して被災者救済に回してほしいです。

2014年11月に大飯原発差し止め控訴審が金沢であり、「泊原発の廃炉をめざす会」のニュース編集者として参加しました。その時に会った志賀原発訴訟の原告団長である北野進さんに能登半島を案内していただきました。とても美しい海岸線は松本清張の「ゼロの焦点」の舞台になりましたね。

読者のMさんはSNSで無事が確認できましたが、北野さんは大丈夫だったのだろうか。「安否だけお知らせください」とメールしました。

「自宅被害はあったけれど無事で金沢の親戚の家に避難している」と知り安堵しました。

道路が寸断されて物資を運ぶのも大変ということは伝わってきますが、原発がどうなったかはほとんど知らされていません。北野さんには珠洲原発と志賀原発について書いていただきましたので、是非お読みください。

1月2日の羽田空港での飛行機炎上に衝撃を受けました。幸い全員無事に脱出できましたが、新年の幕開けは、命の安全について考えさせられました。(みな子)

元旦の朝日
撮影：みな子



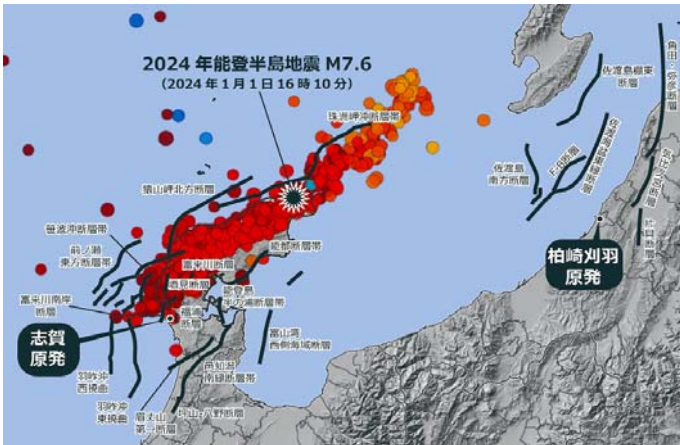
暴力の正当化に批判の眼を 三牧聖子(同志社大学准教授)「戦争のない世界は可能か? 目標

を正しく設定するために」(現代思想1月号) 【第1次世界大戦以降、人類は戦争の違法化を進めてきた。しかし、「自衛」「テロとの戦い」の名のもとで正当化できない軍事行動が展開されてきた。筆者は次のように述べる。「私たちが目指すべき『戦争がない世界』とは、『戦争とは呼ばれない暴力が跋扈(ばっこ)する世界』ではない。(略)私たちは『自衛』や『テロとの戦い』といった形で正当化されてきた、さらには現在も正当化され続けている暴力に、厳しい批判の眼差(まなざ)しを向けていかねばならない】 【】内は「論壇委員が選ぶ今月の3点」のトップにこの三牧論文を選んだ板橋拓己東大教授(政治学)による論評。朝日新聞2024.1.25見え透いたウソをつきまくる政治家たちに我々の未来を託せるか! ラサール石井 東憤西笑 日刊ゲンダイDIGITAL/1/25(木) 9:06配信 大山鳴動して鼠一匹(いや三匹か)。自民党裏金問題は43人不起訴という結果。変わるのかと期待した検察は以前のままあっけない幕引きとなった。/こんな茶番が許されているのか。安倍派だけの問題ではない。自民党全体で20年にもわたって行われていて、キックバックのことは皆知っていた。ところがそれが不記載であったことだけ知らないなんて、誰が信じるか。(M. Mさんのキリバリから)

阻止できて本当によかった「珠洲原発」

元日に発生した能登半島地震によって奥能登の風景、人々の暮らしは一変してしまいました。珠洲市や輪島市では多くの地域が壊滅状態です。さらに被害は中能登地域から金沢市内へ、さらには富山県、新潟県にまでも拡大しました。

マグニチュード7.6、最大震度7という今回の大地震の震央は、かつての珠洲原発の予定地・高屋のすぐ近く、関西電力が立地可能性調査を計画していたエリアの裏山です。高屋では激しい揺れに加え、がけ崩れも多数発生し多くの住宅が倒壊しました。港の岸壁にも多数の大きな亀裂や陥没が生じ、原型をとどめていません。何より驚くのは地盤の隆起です。予定地前の海岸にはきれいな遠浅の海が広がっていましたが、今そこには岩場が広がっています。防波堤を見れば隆起が約2mにも及んでいることが確認できます。いうまでもなく隆起したのは海域だけではありません。原発が建設されたであろう陸域にまで及んでいることは間違いありません。



原子力資料情報室資料

かつて、原発計画があった当時、電力会社や国は「原発は強固な岩盤の上に建てるから大きな地震が来ても大丈夫。万が一大きな地震が起きたら発電所構内に逃げ込んでもらえば一番安全だ」などと豪語していました。当時の知見では高屋の沿岸域に大断層が走っていることを把握できておらず、調査する気もありませんでした。地盤の隆起など想像すらしていなかったのではないのでしょうか。

高屋の集落は地震後孤立し、その後もしばらくは自衛隊の車両しか入れない状況が続きました。高屋の東方約8kmにある中部電力の予定地・寺家(じけ)でも1m程度の隆起がありました。近くの集落では激しい揺れに加え、津波が襲い、沿岸部の家並みは見る影もありません。現在の防災計画ではPAZ(原発から5km圏内)に該当する地域であり、「全面緊急事態で即時避難」ですが、住民は高台に駆け上がるのが精一杯です。高屋、寺家に限らず奥能登全体が地震後はほぼ孤立状態でしたから、もし原発が立地されていれば、重大事故でも避難すらできず、福島以上に悲惨な原発震災となっていたかもしれません。珠洲原発の反対運動を応援していただいた全国の皆さんにあらためて感謝申し上げたいと思います。

止まっていた幸運だった「志賀原発」



今回の大地震は、まったく予想されていなかったわけではありません。珠洲を中心とした奥能登では、3年前から群発地震が続き1昨年は震度6弱、昨年5月5日には震度6強の揺れが市内を襲いました。専門家からは「さらに大きな揺れに警戒を」との声が上がっていました。マグニチュード7クラスの地震を引き起こす大断層が、能登半島の北部沿岸を走っていることが今では明らかとなっており、一連の群発地震がこの断層を刺激し大地震の引き金となる可能性を指摘していたのです。北陸電力が志賀原発2号機の適合性審査のために、原子力規制委員会に提出している資料によれば、「能登半島北部沿岸域断層帯」として長さ96km、想定マグニチュード8.1とされていました。今回の地震は、マグニチュードは北電の想定を下回りましたが、動いた断層は約150kmとされ、北電の想定を大きく上回りました。北電が想定していなかった断層の連動があったと言わざるをえません。今回の地震は、事実をもって北電、規制委の活断層評価能力を否定したと言えます。

昨年の北電株主総会で私は連動の可能性や、志賀原発へのリスクについて問いました。これに対して北電の小田常務は連動を否定し、能登半島北部沿岸域断層帯マグニチュード8.1でも志賀原発は大丈夫と答えたのです。ところが実際は1系統2回線外部電源が受電できなくなり、非常用ディーゼル発電も一台が自動停止するなど、発電所内では多数のトラブルが発生したのです。いずれにしてもこのように原発を運転する資格のない北陸電力ですが、志賀原発は1、2号機ともに2011年3月から停止中だったことから、今回は幸運にも危機的な事態は回避することができました。再稼働を許さず今日までこれで本当によかったと思います。

能登半島地震は最後の警告

一方、北電には「幸運だった」との認識が全くなく、1月31日、能登半島地震後初の記者会見に臨んだ松田光司社長は「志賀原発の安全確保に問題はなく、原子力の重要性は変わらない」と強気の姿勢を貫きました。

しかし、現在北電が規制委に提出している資料を見ると、能登半島周辺には能登半島北部沿岸域断層帯以外にもマグニチュード7クラスの大地震が想定される活断層が何本も走っています。連動すればさらに大きな揺れとなります。また志賀原発の10km圏内に絞ってみれば、東側にはわずか1kmに福浦断層、西側には兜岩沖断層、碁盤島沖断層、そして北側には富来川南岸断層と、志賀原発は三方活断層に囲まれていることがわかります。基準地震動を引き上げればよいという次元ではなく、地表の変位が心配されます。再稼働を許さず、一日も早く廃炉に持ち込まなければなりません。

1月11日に札幌弁護士会館で開かれたハンセン病市民学会交流集会のプレ企画で、重監房資料館（群馬県草津町）が制作したドキュメンタリー「仙太郎おじさん！貴方は確かにそこにいた」が上映され、同館部長（学芸員）の黒尾和久氏が解説しました。その内容を紹介します。

木村真三さんとの出会い、そしてドキュメンタリー制作 黒尾和久

放射線衛生学者の木村真三さんと初めてお会いしたのは、2017年8月6日である。著書や新聞記事を読み、NHKドキュメンタリーを観て、この人に一度会いたいとひそかに願っていた。すると、ひょんなことから私のパートナーの職場同僚が、木村さんの幼なじみだと知ることになり、その方に紹介してほしいと懇願して、当時の職場であった国立ハンセン病資料館にお招きしたのである。

原発事故の風評被害や被災者差別も、ハンセン病問題と通底する人権問題だと考えていたので、放射線衛生学者の立場から、権力におもねることなく、毅然とした態度で仕事を続けている木村さんから多くを学べる！とわくわくしながらその日を迎えた。丸一日かけてハンセン病資料館（東京）と多磨全生園をご案内した。熱心に見学する木村さんに、私の説明も熱をおびた。

僕の親族がいるかもしれない

するとある刹那。「愛媛県の地図なんだけど」と木村さんが切り出した。第一展示室の戦時中の患者強制収容の説明パネルの「癩患者の指導」（昭和12年）から引用した地図は、たまたま木村さんの故郷・愛媛県のもので確かに木村さんはその前に立ち、長いこと地図をのぞき込むようにして観ていた。

「あの地図の好藤村……、僕の故郷なのですが。「⑤」という数字。患者の数を示しているのですよね。あの数字の中に僕の親族がいるかもしれない」。

「えっ？」耳を疑った。「ちょっと待ってください。ご家族にハンセン病患者がいたということですか？」「そうです」と木村さんが応えた。鳥肌が立った。

木村さんの話しは続いた。「仏壇に戒名のない、ただ木村仙太郎とだけ書かれた粗末な位牌があった。子ども心にこの人誰やろうと思っていた」。「その後、ばあちゃんの遺品を整理していたら、その名前が差出人の葉書が一枚あって、それが療養所からのものだった」「うちから癩患者がでたのか、って父親に聴いたら、そうだと聞いた」等々。「葉書は残っていますか。療養所の名前は覚えていますか？」と聞けば、「残念ながら葉書は処分されてしまった。でも、どこか島からの葉書だったと記憶しています」と言う。

木村さんによる仙太郎さん探しの協力を約束したことで、その後、頻りに木村さんと連絡をとるようになった。その過程で、仙太郎さんは、木村さんの祖父の兄で、木村さんからみれば大伯父さんにあたり、もともとは木村家の当主であったことなどを教えてもらった。木村さんも仙太郎さんについて調査を始めたのである。

納骨堂に眠る大伯父・仙太郎さんと対面

仙太郎さんが愛媛の方なので、おそらくは大島青松園（香川県）に収容されたのだろうと、私は照会をかけてみたが該当する方はいないとの回答。大島ではないとすると、長島愛生園（岡山県）だろうか？と、すると思いがけず「該当しそうな方が一人いらっしゃいます」という回答が得られた。あとは遺族にしかアクセスできない領域となる。

木村さんに回答について伝えると「本当ですか」と電話口での声はずんだ。長島愛生園を遺族として電撃

訪問した木村さんは、納骨堂に眠る大伯父・仙太郎さんと対面、蔵骨器にわずかに残った遺骨を引き取り、一両日中に故郷の木村家の墓所に納めた。その報告を聴



1月11日ドキュメンタリーについて語る黒尾和久さん（撮影・みな子）

いて、「ああ良かった。大伯父さん。亡くなったのが1941年だということですから、78年ぶりに故郷に還ったのですね」と応えたように記憶する。

仙太郎おじさんを記録に残したい

木村さんはこの大伯父・仙太郎の帰還の物語を何か記録に残したいと思うようになっていた。福島での原発事故に関するドキュメンタリーをともに製作したNHKのプロデューサーなどにも話しをしてみたが、「ハンセン病問題は難しいからねえ」と色よい返事してもらえなかったようだ。

その時たまたま重監房資料館では、当時の主任学芸員であった北原誠によって、重監房収監者の遺族にインタビューをする映像製作の企画があがっていた。その作品は、開館5周年記念で、2019年10月にリリースした啓発DVD「遺族ふたり」で、「知られてはならない秘密～患者の子と呼ばれて～」として公開した。木村真三さんの願いもいれて、私が担当して、木村さんが大伯父仙太郎さんを家族として取り戻す、ドキュメンタリー「仙太郎おじさん！貴方は確かにそこにいた～展示資料に親族をみつめて」も併走させて、2作を公開するという計画に改めることにした。

今回、北海道の皆さんに視聴してもらったのは、その増補版である。日程の制約もあったのだが、仙太郎さんの愛生園での暮らしぶり、そして死因を知るには、遺族による園所蔵資料の開示請求が必要だったからである。

木村さんは、入園わずか2年に満たないで亡くなった仙太郎さんの資料の開示には当初消極的であったようだ。しかし、その想いを振り切り資料の開示請求を行い、仙太郎さんの入園時の問診記録、検診記録、診察録、死亡診断書、死亡届そして解剖録を確認した。

その様子をつぶさにカメラにおさめて、そして遺族によって開示された木村仙太郎に関する資料を長島愛生園歴史館で展示公開するところまでを収録したのが、増補編「蘇るハンセン病患者とその家族」である。2023年5月にリリースした。

今、木村真三さんは、医学者として、専門家とともに、さらに解剖録の検討を進めている。重監房資料館では、開館10周年を迎える来年度に、木村さんの協力を得て「仙太郎おじさん」完結編の制作を行う予定である。乞うご期待。

*「遺族ふたり」シリーズは、団体に限り無料貸出をしています。ホームページないし電話でお問い合わせください。担当：香川

Books



沖縄を戦場にしては
ならない

戦雲 (いくさふむ)
要塞化する沖縄、島々の記録

三上智恵著 集英社新書
1, 320円

島のど真ん中にミサイル基地が作られてしまった石垣島で、「また戦雲が湧き出してくるよ、怖くて眠ることも出来ない」と抒情詩「とうばら一ま」にのせて歌う山里節子さんの言葉が冒頭に記されています。

三上智恵さんは自衛隊による軍事要塞化が進む島々の抵抗を描いた映画「標的の島 風(かじ)かたか」(2017年)以降も基地が造られミサイルが搬入されていく様子取材してきました。

日本政府が主導する、近隣諸国を仮想敵とした防衛計画のもと、戦力配備が続く沖縄、南西諸島は予断を許さない状況が続いています。「戦争反対」と当たり前に叫ぶことが難しくなっていると感じるこの頃。それでも、闘い続ける人々の姿を伝え続けます。

三上さんは今こそ「戦わない覚悟」「戦争に協力しない覚悟」が必要だと訴えます。「台湾有事」が絶対起きると、煽っているのは政府ではないでしょうか。2024年度の軍事費は7兆9496億円で過去最高です。

「中国・台湾に最も近い私たちの県土に次々にミサイルを置いていく行為が、強力に戦争を呼び込んでいるようにしか見えない。私たちがいることを忘れてミサイル戦争の準備に入ったとしか思えない」と三上さんは書きます。「埋められていくのは辺野古の海だけではない。この国の未来だ。圧殺されたのは沖縄の声だけではない。いつか助けを求めるあなたの声だ」に襟を正す思いがしました。

基地の地下化、シェルター設置、弾薬庫大增設、離島を含む空港と港湾の軍事化が、民意をよそに急ピッチで進んでいるのです。本土メディアがこの問題をほとんど報じない中、沖縄から日本全土に広がる戦雲の予兆に警鐘を鳴らします。

沖縄の現実に心が折れそうになることもある三上さんは、山城博治さん、島袋文子おばあ、山里節子さんら、折れない意志を持つ人たちから力をもらったのだと思います。植村裁判を闘う私たちもどれだけ励まされたか知れません。

エピローグに表紙の絵に触れ「がっしりした与那国馬にまたがり、髪を振り乱し暗雲に突き進む少女と、裏面はヤギと心を通わすあどけない少女が描かれている。表紙の少女は、島々で闘っている女性たちの象徴だ」と述べ、本来の姿は、穏やかな島で暮らしていた幼い頃の姿は、ヤギと少女のようだったに違いないのだと。私も北海道の原野でおじいちゃんの農耕馬に乗せてもらった日を思い出しました。

同名タイトル『戦雲』のドキュメンタリー映画が全国で公開されます。私も制作に協力したひとりです。是非観てください。(みな子)

あなたにとって言葉とは
何ですか

戦争語彙集



オスタップ・スリヴィンスキー
著, ロバート キャンベル 訳
岩波書店 2,200円

詩人オスタップ・スリヴィンスキーさんはウクライナ西部リビウ出身。

2022年2月にロシアが侵攻を開始した直後、リビウは安全な場所を求めて避難する人々の中継地点となり、鉄道駅はたくさんの人であふれました。

スリヴィンスキーさんは、駅でボランティア活動しながら耳にした人々77人の証言をまとめました。翻訳は日本文学者のロバート・キャンベルさん。本書にはロバートさんがウクライナを訪ねての経験を題材とするエッセイも収録されています。

戦争が始まった頃は人々は言葉を失いました。でも沈黙ではない、話を聞く人を求めているのだと思い耳を傾けました。

一編読み終えるたびに、これはどういう意味だろうと考え込んでしまいました。語られた言葉はユーモアと皮肉が込められています。

食料がない中でも、家族のために手に入れたい「ケーキ」、避難を拒んで亡くなった「おばあちゃん」、砲弾が鳴り響いているときは浴びてはならない「シャワー」、爆弾でガラスが砕け散るのを防ぐために窓にテープを張ると、星みたいになる「星」、ムスリムの女性が隣に座った女性に頼んだ悪魔を追い払う「お祈り」、かつて恋人と聞いていた庭先に林檎が落ちる音と、ミサイルが落ちる音が重なる「林檎」など。小さな話に戦争への皮肉、怖さをユーモアでくみみます。

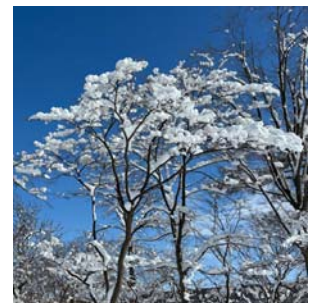
大切な思い出や美しいイメージが戦争と結びつく様子が、言葉を通して見えてくるのです。

戦争によって、人々が抱く言葉の意味が全く変わってしまったことに驚きを禁じ得ませんでした。

スリヴィンスキーさんは「言葉こそがコミュニティを作り、戦争の現実に打ち勝ち、私たちを守ってくれるものになる」と語ります。キャンベルさんは「言葉もシェルターになれるのではないかと人々にとっての杖になったり、屋根になったり、場合によっては、飲料水にもなっているのではないかと語っています。

表紙は、激戦地で家を壊された女性とその場に留まり咲かせたというユリの花にちなんでいるそうです。昨年亡くなった母も庭にたくさんの花を咲かせていました。戦争を経験した世代です。母の名にちなんで墓前にユリの花を飾りたい。(みな子)

2.23 樹木は雪の華に。でも陽射しは春です。
(み)



信仰に生きた135人の証言

証し 日本のキリスト者

最相葉月著 角川書店 3,498円

本書は、最相葉月さんが、北海道から沖縄、五島、奄美、小笠原まで全国の教会を訪ね、そこで暮らすキリスト者135人に、神と共に生きる彼らの半生を聞き書きしたものです。

「信仰とは何か？」という有史以来の謎に向き合い、終章の「コロナ下の教会、そして戦争」で、日本におけるキリスト教の現在も照らし出します。

構想10年、取材6年の1000頁を超える圧巻の書です。クリスチャンといっても、その道筋は多種多様です。答える人は良い面しか言いたくないと思うのに、ネガティブな発言もきちんとすくい取っています。これだけたくさんあることにも驚き、その信仰もさまざまですが、そこには、世間一般の幸せと縁がなかった人たちも多く登場します。

キリスト教に出会う人は、恵まれた人という私のこれまでの思い込みが全く違っていたことに気づかされました。教派により、人により、さまざまに異なるあり方が描かれ、キリスト教に関心のある人、最初の一步を踏み出したい人には貴重な証言だと思います。つらい話もたくさんあります。でも聴き手の誠実さが、語り手の深い思いを引き出しています。

その人が自然災害や戦争、事件、事故、病のような不条理に直面しても、なおその信仰は揺るぎないのであったか？と最相さんは聴きとっていきます。

私は幸か不幸か、教会には縁がありませんでした。父の転勤で1～2年で転校を繰り返したせいで、地域に溶けこめた記憶が少ないのです。本好きの父はキリスト教を本で知り話題にしたことがあった思い出しました。

私は聖書を深く読んでいるわけではありません。でも自分の心境にぴったりの言葉が必ず見つかります。本を読む人なら分かると思いますが文章の1節に救われることであると思います。夫の病気で入院中は聖書の詩編を小さな声にして読みました。なぜか心が安らぎました。

本書で私が一番心に残ったのは、第5章の「神を伝える」にあるカメルーン出身のケベック外国宣教会司祭のエミール・ロドリグ・エメテさんの言葉です。「洗礼は新しい人になるための出発よ。自分の生き方よ。自分の生き方が証しだよ。それが回心、コンヴァージョンということです。それがキリスト教信仰のダイナミックなところなんです」。福島原発事故を体験した方ですが、「新しい人」という表現が嬉しいです。私もそのひとりでありたい。

あとがきに「キリスト教とは『自分を救えない神』を信仰する宗教である。自分で自分を救えない神が、人々に掟を与えたのである」と最相さんは書きます。ちょっと分かりにくいですが、十字架上で抵抗することもなく死んでいった「神の子」イエスが、「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という掟を示したのです。弱いキリストに親近感がわきませんか。(みな子)

悪戦苦闘の犬樫探検

裸の大地第二部 犬樫事始

角幡唯介 集英社 2,530円



年末年始は本を読んでも集中できませんでした。ようやく本を無心に

読みたいと読了したのが「裸の大地第二部 犬樫事始」です。

2019年から2020年、2年間の犬樫事始めの記録です。

100年前の狩人のように土地を信頼し、犬樫を操り、獲物をとりながらどこまでも自在に旅するのが角幡流の探検旅。そのための悪戦苦闘が始まる。樫がふっ飛んで来た初操縦の瞬間。あり得ない場所での雪崩。犬たちは協調できるのだろうか。

12頭の犬で樫を引かせて、アザラシを求めてトレーニングするのですが、それぞれに個性的な犬たちは暴走を繰り返します。しかし犬たちは、いつしか「ハゴ、ハゴ」と叫べば左に。「アッチョ、アッチョ」と叫べば右に進めるようになります。だんだん変わっていく様に、私もその中でハラハラして見守っているのです。角幡さんは変わります。

「表面的には私は人間族として、御者として、犬たちのうえに君臨しているように見える。犬を飼っているのは私だ。でもじつのところ、そのわたし自身、犬たちがつくり出す物語の流れに組みこまれ相互依存関係のなかで生き方そのものが変わりつつあった。(略)私は犬に飼いならされてもいる。すでに私は、自分という存在を、犬の群れの生活のなかで位置づけたいと思うようになっていた。この旅が旅以上の何かである証であるように思った」と書きます。もう犬たちを単なる動物として見ていないのです。同志のような友情を感じました。

めざすはカナダ最北部のエルズミア島。しかしコロナで絶好のチャンスを逃します。でもグリーンランド北部にある巨大な陸塊ヌッホアの心臓部を探検します。不毛だと思われた大地でジャコウウシと出会い、見事に射止めます。54日間、1200キロあまりの旅を生き生きと活写しています。

コロナ禍で犬たちを現地のイヌイットたちに預けます。家族のような犬たちはどうなったのか。ラストは悲しくて涙が出ました。

角幡さんの探検には厳しい自然に対峙して生きることの根源的な問いかけがあり魂が揺さぶられます。第三作も楽しみです。(みな子)

購読料と寄付をありがとうございます

(敬称略) 2023. 12. 14~2024. 2. 19

高橋備 黒田秀之 中谷眞理子 高橋政春 宮崎信恵 泉恵子 梅沢俊 甲野恵美 佐藤毅 井上昌和&浅川身 奈栄 菊地和美 増子捷二 須永興奮司郎 藤田春美 長澤恵子 田畑豊 則末尚大 亀田法子 佐藤礼人 購読料とカンパ71,000円は印刷と送料に使わせていただきます。溝井留美 図書券も活用させていただきます。郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 年間2,000円(郵送読者)をお願いします。web読者のカンパも歓迎します。

サイレント映画『第七天国』を柳下美恵さんのピアノ伴奏で楽しみました



『第七天国』はパリの下町の下水道掃除人の若者と薄幸の娘との恋物語。チコは姉に叩かれている若い娘ダイアンを救い、自分のアパートのある最上階の屋根裏部屋に匿う。

やがて二人の間に清い愛が目覚める。そこは「第七天国」だ。彼女が結婚式の晴れ着を着たその日に、第一次世界大戦がはじまり、チコは出征する。二人は離



2.4 坂尻昌平さんと柳下美恵さんの対談

互いの名を呼び合い、再会することを信じて…。フランク・ボーゼージ監督の作品です。2月4日の札幌映画サークルの上映会。サイレント映画をピアノ伴奏で表現したのは柳下美恵さんです。

柳下さんは国内外の映画館、映画祭で活躍する日本初のサイレント映画ピアニスト。洋画、邦画を問わず、全ジャンルの伴奏をこなしている方です。

伴奏はギャグの場面ではユーモラスに、ロマンチックな場面ではムードを盛り上げるなど、場面に合わせて即興で演奏すると紹介にあり、ワクワクしながら映画とピアノを楽しみました。

チコの「上を向いて、俺は特別な奴」という生きる道を照らしてくれるような言葉は勇気をもらえます。ダイアンは「私は幸せに慣れてなくて」と言うと、チコも「僕の瞳は君でいっぱいだ」と返す二人が初々しい。

天と地を行き交う映像も見事です。最上階の部屋から隣の建物に架けられた橋と下界の街路の怖さ。それを克服していくダイアン。人を愛するって強くなることでもあるんですね。天井から入ってくる光が二人を祝福しているようでした。

トーキーへと変わる時代に映画はここまで作り上げられていたのかと目を見張りました。地下で働いていても、住まいと気持ちだけは天を向いて生きる姿がいいです。思いがけないラストは、どうぞ想像していただけたらと思います。本作は1927年第1回アカデミー監督賞、主演女優賞などを受賞しています。

また機会があったら柳下さんのピアノと映画を是非企画してほしいです。(文と写真・みな子)



2月4日 柳下美恵さん(右から4人目)を囲んで映画サークルのみなさんと懇親会(写真はお店の方にシャッターを押してもらいました。参加者から掲載の許可を得ています)

何気ない日常の輝きを紡ぐ『PARFECT DAYS』

樋口みな子

札幌映画サークル会報2月号掲載を紙面の都合で短くしました。



『パリ、テキサス』('84)『ベルリン・天使の詩』('87)のヴィム・ヴェンダース監督が日本を舞台に撮った映画です。主演の役所広司が2023年のカン

ヌ国際映画祭で男優賞に輝き話題になりました。

下町の古いアパートで暮らす平山(役所広司)はまだ暗いうちに、近所の女性が竹ぼうきで掃く音で目覚めます。苗木などを湯呑み茶碗などに植えて毎日水をやるのが日課です。外に出て空を仰ぎ、缶コーヒーを自動販売機で買って、作業道具が整然と並んだ軽自動車で、カセットテープの音楽を聴きながら渋谷の公共トイレに向かいます。このシーンで流れていたのは、アニマルズの「The House of the Rising Sun」(朝日のあたる家)でした。音楽が、環境音と一緒に流れるのも、日常感があって良かったです。木漏れ日の写真を撮るのが、平山の一番の楽しみです。帰宅したら近所の銭湯で一番風呂に入りいつもの小さな居酒屋で食事と少しのお酒をたしなむ。そして、文庫本を読みながら就寝。こんな日々を丁寧に描きます。それだけなのに、一日として同じ日はありません。

公園の木漏れ日、川や橋、高速道路から見る東京スカイツリー、東京のど真ん中とは思えないほど自然の美しさを見事に捉えています。平山は無口でほとんど語りませんが、平山の目で見える世界を私も見ていることに気付かされました。

姪ニコは(中野有紗)が母(平山の妹)と喧嘩して平山の家に居候します。ニコが「なぜ母とは会わない?」と訊ねると、平山は「つながっているようでつながっていない世界がある」と答えるのです。それとは逆に「つながっていないようでつながっている世界」を日々感じているのはこの映画の主題のように思いました。昼食時にいつも鉢合わせる女性や、トイレの棚の隙間に隠された紙きれで行われる見知らぬ相手との〇×ゲーム、そして路上でダンスを踊るホームレスなど、無数の「つながっていないようでつながっている世界」に驚きます。私も外に出ると出会うご近所の年配のご夫婦がいます。夫が、先導して、何らかのご病気があるらしい妻がその後ろを歩く姿です。毎朝、散歩に連れだって歩く姿に尊さを感じます。「デイサービスを利用せずに夫が看ていらっしゃるのだな」と想像しています。

忘れがたいシーンがありました。平山が隅田川のほとりで、行きつけのスナックのママの元夫(三浦友和)と語る場面。癌を患っており、余命いくばくもないと語るこの男性は、平山にいきなり「影と影が重なった部分は濃くなるのか」と問いかけます。平山は実際に二人の影を重ねて、互いに「濃くなった」「変わらない」と話します。それまでつながっていなかったお互いの人生が、一瞬だけ重なり合う。ジーンとしました。

観客動員数50万人突破！

『ヤジと民主主義 劇場拡大版』を観て

文と写真 高橋 僑



テレビのニュースで初めてヤジ事件の顛末を知った。この事件を追跡し始めたのはこ

左から山崎裕侍監督、長沢祐記者、大杉雅栄(まさえ)さん、桃井希生(きお)さん
んな偶然が出発点です。

2022年の3月25日札幌地裁の廣瀬孝裁判長の男女2人への賠償を命じた判決には胸が躍り感動しました。笑われるかも知れませんが、本当に「大岡越前の守」はいるのだと思いました。

この裁判経過を報じる「ヤジと民主主義」が映画となり、シアターキノで初上映される時、関係者の皆様が登壇されそれぞれご挨拶が有りました。私は勿論駆けつけ、山崎監督著の本「ヤジと民主主義」も購入し、じっくりと本と映画を味わいました。一方的な出会いと興味深い書籍との出会いです。

その後、道の控訴により2023年、6月22日の札幌高裁判決が有りました。私や多くの関係者の予想に反し、大竹優子裁判長からは思いもかけない言葉が発せられました。大杉さんについて、警察官の行為は妥当と認定して1審札幌地裁の賠償命令を取り消す判決を出したのです。信じられません。大杉さんも「判決を聞いた時はびっくりして頭の中が真っ白になった。どうしたら良いのかという気持ちです」と。映画を観てさらに応援しなくてはと思いました。

困難な旅に密着取材



『ビヨンド・ユートピア 脱北』

マドレーヌ・ギャヴィン 監督

1000人以上の脱北者を支援してきた韓国の牧師キム・ソンウン。彼が直面した次のミッションは、北朝鮮から中国へ渡り、山間部で路頭に迷うロー家の脱北だ。2人の幼い子供と80代の祖母を含めた5人家族を一度に脱北させることは、とてつもない危険と困難が伴う。キム牧師の指揮のもと、各地に身を潜める50人ものブローカーが連携。中国、ベトナム、ラオス、タイを経由して亡命先の韓国を目指す決死の脱出作戦が行われる。タイへ入るまでに各国警察に見つかれば北朝鮮へ強制送還され、命の保障はありません。もう一つは北に残した息子を脱北させようとする母ソヨン。二つのミッションが並行して進みます。スマートフォンや携帯電話で撮影された生々しい映像も収められています。緊迫した家族の表情が胸に刺さりました。韓国にたどり着いた祖母の安堵した表情が忘れられません。キムさんの自分の命も危険に曝されながらの脱北者支援に驚きと共に敬意を伝えたい。生きていくことの尊さに涙しました。(みな子)

ドキュメンタリーのような映画で、音楽も主役です。再び日常に戻った平山が、またいつも通りに仕事に出勤します。このシーンでは、ニーナ・シモンの名曲「Feeling Good」に併せて、首都高を走る平山の顔が長回しで映されます。

It's a new dawn, it's a new day, it's a new life for me
夜が明けて、新しい一日が始まる、私は私の人生を生きる

朝日を受けて輝く平山の顔は、満ち足りたような笑みから、徐々に泣き顔へと変わっていく。その平山の表情には彼の人生の悲喜こもごもが全て凝縮していると同時に、人生のロードムービーを見る私たちの顔のようでもあると思えました。一度きりの今を生きる平山は、いつかは死を迎えるだろう。さまざまな思いが詰まった表情を忘れません。私は38年間一緒に暮らした夫を亡くし、ぽっかり心に穴が空きました。でも平山のラストシーンを観て、再生の一步を踏み出せました。

私にも平山と共通点がありました。午前6時半に目が覚めたらシャッターを開ける。晴れていたなら、身支度して、外に出て朝日や朝焼けをスマホで撮ることで。春になったら草花が加わります。私も一日一日を平山のように誠実に生きていきたい。

音楽と言えば20年以上前に観た『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』('99)もヴェンダース監督ですね。

世界には優しい場所がたくさんあるよ

『夜明けのすべて』

三宅唱監督



原作は瀬尾まいこの同名小説。「ケイコ目を澄ませて」で、多くの観客や映画界から高く評価された三宅唱監督作品。

PMS(月経前症候群)に苦しむ藤沢さん(上白石萌音)はパニック障害がある山添くん(松村北斗)と栗田科学という教材のプラネタリウムなどを制作する会社で出会う。友人でも恋人でもないけれど、お互いの生きづらさを共有する同志のような信頼関係が芽生えていくのです。

三宅監督は「栗田科学という職場で働きながら、他者と出会い直し、さらにはこの街や過去を感じ、もっといえば地球や宇宙を改めて感じることで、自身を位置づけ直し、囚われていた場所からゆるやかに解放されていくことができそうだとイメージが膨らんだ」と語っています。ここの部分は、原作にはなく、三宅さんのアイデアです。私もプラネタリウムのシーンが一番好きで、夫を思い出して息子と二人で泣きながら観ました。夜の事務所が美しい。藤沢さんと山添くんが、デスクの小さな明かりの下で、移動プラネタリウムのプログラムの原稿を考えているシーン。また、社員が集まって宇宙の映像を見ている事務所を窓外から撮ったシーンは、まるで宇宙船のように見えました。この映画は広大な宇宙の中でバラバラに生きている人たちが、ひと時、同じ場所に集まって、時間をともに過ごす。こんな優しい職場が全国のあちこちにあつたらいいなと思いました。

プラネタリウムで星の解説文章を読む上白石萌音の声は今も私の心に残っています。(みな子)

寒緋桜と三重連の水車



各地から春らしい写真が届きました。北海道はまだ雪が深いですが、皆さんの投稿から自然の息吹を感じてください。

コンサドーレ札幌のキャンプ取材で沖縄に行ってきた。競技場へ行く途中で寒緋桜(左写真)が咲き、後方には電照菊の畑が広がり、道路を挟み今は珍しい三重連の水車(右写真)が回っていました。

1月31日、沖縄県国頭郡恩納村で 石井一弘さん(札幌市)



流水と天の川



2月下旬から3月の夜明け近くだけ見られる横たわった天の川です。流水とのコラボめったに撮れず、私も7年ぶりに撮りました。

撮影場所:野付半島 2月19日 3時36分撮影
及川文さん(札幌市)

梅とメジロ



早春の景、梅にメジロが来た。いつも思うこと二つ。草木の花が湛える蜜。土から吸い上げた養分がどんな魔法で甘い蜜になるのだろう。人間が土を台所に持ち込んでこね回しても蜜にはならない

のに。二つ目は自然の摂理。私の地元では梅の花が咲く時期はまだ昆虫が少なく、花の受粉はメジロが頼り。梅は昔からメジロ頼りでこの時期に花をつけるようになったのだろうか。

2月1日 自宅の庭で 石川旺さん(神奈川県)

故郷の山ユルラを思いえがいて



お正月は我が家でチベット人ファミリーと一緒に過ごしました。チベット子どもサマーキャンプの友人たちも集まって、土地の守護者たる二荒山=補陀落山(ふだらくせん 男体山、女峰山、太郎山)へ平穏な一年であることを祈りあげました。それぞれの心の中に故郷の山ユルラYul lhaを思い描いたことは言うまでもありません。

写真は日光連山、左から太郎山と女峰山
貞兼綾さん(日光市)

あとがき

何とか銀河通信を再開できました。印刷通信だけを読んでいる読者は私の夫が亡くなったことに驚かれ、何人かの方からお手紙を頂きました。とても返信できるような状況ではなく大変失礼しました。夫が亡くなって3ヵ月。さまざまな手続きが終わると、寂しさがドッと訪れました。覚悟をしていましたが、最期を迎えた病院ではわずか10日しか生きられませんでした。亡くなる前日、胸騒ぎがして病院に電話すると「高熱を出している」と。「病院に行きます」と伝えましたがコロナ禍で面会はできないと断られました。主治医に繋いでもらいたかったです。家族に伝えたいことがあったのでは、と今も心残りです。その前の病院も含めると、1ヵ月以上も食事が摂れず点滴だけの治療でした。夢で「ご飯は？」と問われました。夕飯の時にふっと思い出します。書かなくてはと思う銀河通信があつて良かったです。これからも応援お願いします。(み)

春節に4世代が揃って



長女はアラスカから夫を連れて帰ってきました。その息子と娘はアメリカの大学を卒業してそれぞれ就職しています。次女は台中市の銀行員に嫁いだ娘とその長男を連れて来ました。長男の嫁は私の孫を連れて里帰りしました。みんな元気です。

2月11日(旧正月2日)に賑やかに会食
張 玉龍さん(台北市)